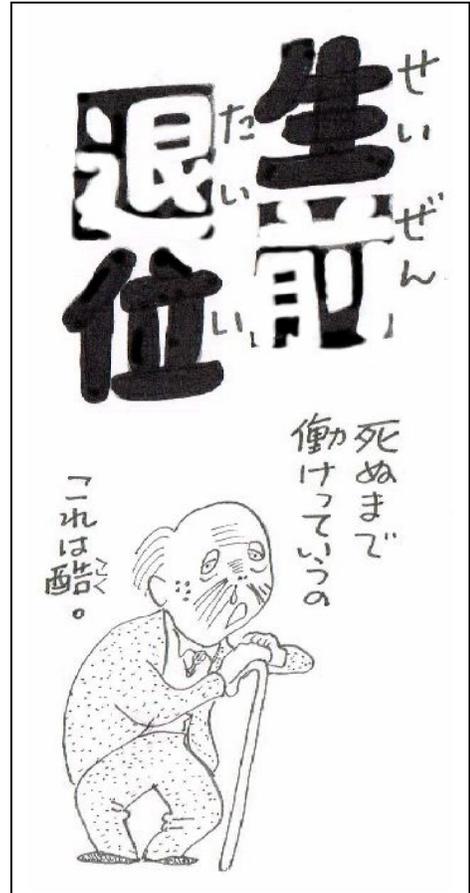


先週の回答



去年(2016年)の8月8日、現天皇明仁陛下が会見して、「ここに私の気持ちをお話し致します」と口火を切られた。

まず「天皇が高齢となった場合、どのような在り方が望ましいか、個人として考えてきたことを話したい」と前置きされて、二度の外科手術と高齢による体力の低下を自覚、「今後、従来の重い務めを果たすのが困難になった…」そして「天皇が十分にその立場に求められる務めを果たせないのは望ましくないと考ええる」と八十二歳の天皇陛下がうったえられたのがご存知のとおり。

従来の重い務めとは、憲法にも定められている第7条の『天皇の国事行為』である。十の国事行為のうち、栄典を授与

する。外国の大使および公使を接受する。儀式を行う。この三つは、それぞれ公の場に正装で出席して(時には海外に)歓談なり談笑なりをしなくてはならない。

これは体力的にも気疲れもする。そもそも企業に定年制があるのは、ある年齢に達すると、長年の勤続疲労が蓄積されるので、一定の時期が来たら現役を引退して老後をゆつくりと暮らしてもらおうが主旨で制定されたもの。

天皇陛下も神でもない限り、歳とともにお疲れになるのが道理。企業も官庁も六十五歳を目途にしている。八十二歳におなりの天皇陛下は十五年以上延長されているわけになる。陛下ご自身から口を開かずとも、周りが慮るべきではないかと、私は思う。

で、思い出すのが、ある裸一貫から興

して大会社にしたA社長がなかなか辞めない。周りの重役たちは「そろそろご引退なさっては」の恐恐謹言ができない。思い切つて進言すると、「何を言うか、わしがいなくなつたらこの会社はどうなる! ぶれー者」と一喝されて引き下がる。

一方、同じく一代で築き上げたB社長は、「そう言われれば、わしも長く社長をやりすぎたかも知らん、そろそろ引き際じゃな。なあに、わしがいなくなつたつて、この会社はみんなの力があるから、ビクともしないだろう、はははは」と社長の椅子からすんなり下りた。

Aの方は長く社長が居座りすぎてあえなく倒産。Bの方はますます隆々と栄えたんですって。

いつまでもしがみついているのは見苦しいが、ご自分から限界を感じて、辞意を述べるまでほつとくのも残酷ではないかと、わたしは思う。



